
くじびき勇者さま 誰が愛の女神よ！？

あきらたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くじびき勇者さま 誰が愛の女神よ!?

【Nコード】

N7717K

【作者名】

あきらたろう

【あらすじ】

HJ文庫より出ている

「くじびき勇者さま」全11巻
の二次創作です。

（前書き）

4 番札のルビノの病気が、この話のモトネタになっています。
ルビノ自身は、出てきません。

疫病学者と栄養学者がメイベルの前で激しく議論をかわしてる。

世界大戦が終わり、メイベルが東大陸に戻り、南アルテースの新首都「聖メイベル」の大統領官邸に入居して最初の重要な仕事で、この二人の議論を聞いて結論を出すことだった。

疫病学者は、見た目は細身であり高く声を上げて、

「すべての病気は、病原菌が人間の体内に入ることでおこるのです。すなわちルビノ病も病原菌によって起きる病気なのです」

栄養学者は、太めの体をゆらして反論した。

「ルビノ病は、栄養不足によって起きる病気だ。新鮮な食料を摂取すれば治ることをどう説明するのだ？」

疫病学者は、反論、

「新鮮な食料に、ルビノ病の病原菌を殺す薬としての効き目があるとすれば説明がつく」

栄養学者は、それに反論、

「違う。新鮮な食料を摂取したことにより不足していた栄養が補われたからルビノ病は治るのだ」

疫病学者と栄養学者の二人は、この内容の議論を延々とエンドレス

で続けている。

ナバルがうんざりした顔をして、

「メイベル。二人の議論している意味は、俺にはさっぱりわからんが、ルビノ病というのは、メルカトルの女将さんの娘のルビノちゃんとの関係があるのか？」

メイベルは、悩んでいる表情をして、

「そうよ。ルビノちゃんの不治の病と言われていた病気は、今は医学界では、ルビノ病と呼ばれているの」

「メイベルが料理で直した。あの病気か？なんでルビノ病って、いわれるようになったんだ？」

「あの病気は、帝国全土での定まった病名というのは無かったの。地域によって、いろいろな病名で呼ばれていて帝都サクラスあたりでは、農村に住んでいた人が、サクラスに移り住むと、あの病気になる人が多かったから『帝都病』とよばれていたわ」

「なんで、農村からサクラスに引越すとあの病気になるんだ？」

ナバルが疑問を口にすると、

メイベルは答えた。

「農村に住んでいる時は、主に雑穀の混じったパンやご飯を食べているわ。その理由は…」

ナバルが途中から口を挟んで、

「農村は、農作物を売ること、現金収入を得ている。小麦や米は、都市部に高く売れるから、ほとんどは都市部に売却されて、比較的安い雑穀を農村の住人は食べることになる。だろ？」

メイベルは驚いて、

「その通りだけど… ナバルよく知ってるわね？」

「俺は、国の財政に関する書類には全部目を通して。その中には、住民の収入に関するデータもあった。そこから考えればこういう結論になる。」

メイベルは、さらに驚いて、

「ナバルが、考えるって……」

「あのなあ、何に驚いてるんだ。とにかく話を続けてくれ」

メイベルは、話を戻して、

「味はお米や小麦に比べれば、雑穀の方が不味いけど、栄養は雑穀の方があつたわ」

「だから農村に住んでいる時は、雑穀から必要な栄養を得ているから、あの病気になるいわ」

「でも、サクラスのような都市では、お米や小麦が安く買えるから、それらを主に食べて、栄養が不足してあの病気になるの」

ナバルは、疑問を言った。

「いつだったか、メイベルが言っていたように、バランス良く、いろいろな食べ物を食べればいいんじゃないか？」

メイベルは答えて、

「その通りなのだけど、栄養についての知識は、一般に普及していないし、お米や小麦が、お腹一杯食べられれば、それで満足という人も多いのよ」

「ところで、肝心のルビノ病って呼ばれるようになった理由をまだ聞いていないんだが？」

ナバルの質問に対して、メイベルは、イヤそうな表情をして、

「うう……言いたくない」

そこにお茶を運んできたパセラが、

「ナバルさぁん。メイベルは恥ずかしがっているんです。『少女ルビノの不治の病を治した聖女メイベルの奇跡』と呼ばれているのを」

「わあ！パセラ！言わないでよ！」

メイベルは両手をパセラに振って止めようとする。

「どういうことだ？」

ナバルがパセラに質問する

「あのですねえ。ルビノちゃんが完治したことを診察したお医者さんが診療記録に治った原因を『聖女の奇跡』と書いたことから、あの病気を研究している学者さん達に注目されて『少女ルビノの病気を治した聖女の奇跡』を省略して『ルビノ病』と呼ばれるようになったんです」

「それは、わかったが、あの二人は、何を議論しているんだ？」

メイベルが答えて、

「ルビノ病の治療法として新鮮な食料をバランスよく食べれば治るということは、医学界では結論が出たの」

「でも、なぜ新鮮な食料を食べれば、治るのかという理由に、ついには二つの説が出ていて、激しい議論になっているの」

「疫病学者の人達はルビノ病になる病原菌が体内に入って病気になるって、新鮮な食料を食べると治るのは、新鮮な食料に病原菌を殺菌する薬としての効果があって、それで治ると主張しているわ」

「それに対して、栄養学者の人達は、新鮮な食料を長期間食べないでいると、体に必要な栄養が不足してルビノ病になって、新鮮な食料を食べれば不足していた栄養が補われるから治ると主張しているわ」

ナバルが呆れた声で、

「どうすれば治せるか、わかっているんだから、その理由なんてどうだっていいじゃないか？」

メイベルは、それに対して、

「そんなわけには、いかないのよ科学というのは、なぜ、そうなるのかという理由を考えるものなんだから」

ナバルは、

「ところで、なんで、あの二人はメイベルの前で議論しているんだ？」

「帝国技術研究所では、二つの学説のどちらが正しいのか結論が出ないので、ルビノ病を治した、わたしに結論を求めてきたの。それで疫病学者・栄養学者から代表者が一人ずつ、わたしに会いにきたの」

「でも、結論を求められても、わたしは、どちらの学説にも味方できないから困ってるの」

「あれ？メイベル、栄養不足からなる病気だと言ってなかったか？」

「その通りよ。」

「だったら、あの二人にそう言ってやればいいじゃないか」

「そついうわけにはいかないのよ」

「なぜだ？」

「栄養説に科学的な根拠を示すことができないの。どの食べ物のにどんな栄養がふくまれているのかは、まだ研究中で、わかっていないことの方が多いのよ」

「だから、なんの栄養が不足して病気になっているのかを証明することができないわ」

「なら、病原菌説が誤りだと証明してやれば、いいんじゃないか？」

ナバルが提案すると、

「たしかに、今のところ、ルビノ病の病原菌は見つかっていないわ」

「なら、病原菌説は間違いで決まりじゃないか？」

「そうはいかないのよ。病原菌が無いということの証明は難しいのよ」

「どういうことだ？」

「例えば『その島に蛇はいる』『その島に蛇はいない』どちらが簡単に証明できると思う？」

ナバルは少し考えて、

「『蛇がいる』方だろうな島を少し調べただけでも蛇が見つければ、いることは証明できるが、『蛇がいらない』方は島全部を調べて蛇が見つからないということを証明しなければならない」

「その通りよ。蛇が見つからないとしても、見逃しているのかもしれないから、『蛇がいない』ことは証明は難しいわ」

「それと同じで、ルビノ病の病原菌が無いことの証明は難しいわ」

メイベルが、近くに別な人間の気配を感じて、そちらに顔を向けると、

いつの間にか、議論をやめて、メイベルとナバルの会話を聞いてたらしく、疫病学者と栄養学者が、うなずいていた。

「わかりました。聖女さま」

疫病学者と栄養学者の二人がメイベルに向けて話した。

「まだ、私たちの研究は足りないということですね」

細身の疫病学者が話すと、

「確かに不十分なデータからは、正しい結論を出すことはできません」

太めの栄養学者も言葉を続けた。

「さすがは聖女さま。我々の研究は、まだ未熟であると我々自身で気づかせるたにも、勇者さまとの会話という形で遠回しに教えてくださるとは」

メイベルは、困惑して

（そんなに過大評価されても…）

と口に出す前に、

「ただちにサクラスに戻り研究を続けます。研究結果は後ほど聖女さまにも送りますので」

と部屋から出て行ってしまった。

それから、一年以上が経過した。

聖メイベルの大統領官邸で執務しているメイベルは、ナバルとの結婚についての二度目のくじびきもハズレだったので、その時の精神的ショックが残っていて、やや不機嫌であった。

そこにパセラが入ってきて、

「メイベルう。以前来た。疫病学者さんと栄養学者さんからお手紙ですう」

「そう。研究結果を送ってきたのかしら？」

「いいえ。小さな封筒が一通だけですう」

「なにかしら？とにかく読んでみるわね」

封筒に入っていた手紙をメイベルが読み進むうちに、目に涙を浮か

べてプルプルと肩を震わせた。

「どうした？メイベル？」

ナバルが心配して声をかけると、

パセラがメイベルの手にあつた手紙を読んでもみると

「あのですねえ。疫病学者さんと栄養学者さん結婚なつたそうです」

「結婚式の写真も、入ってましたあ」

疫病学者が細身の体に花嫁衣装を来て、栄養学者は花婿衣装を着ている写真だ。

「前に、ここに来た時は、仲が良い男女にはみえなかったが…」

ナバルが首を傾げると、

「あのお二人は、あれから共同研究している内に、お互いに愛が芽生えて結婚なさつたそうです」

「メイベルのことを愛の女神だつて書いてますう」

「愛の女神ですって！？わたしが愛の女神なら、なんでナバルのくじびきはハズレるのよ！？」

「愛の女神なんて大嫌あ?????いつ!!!」

とメイベルは絶叫した。

それを落ち着かせようと、ナバルは何も言わずに、メイベルを抱き締める。

それでメイベルは落ち着きを取り戻して、ナバルの顔を見つめる。

そして、ナバルとメイベルは、お互いにしか聞こえない。小さな声で仲良く会話をしている。

「お邪魔しては、いけませんねえ」

二人の甘い雰囲気を見てパセラは静かに部屋を出ていくのであった。

（後書き）

4 番札でメイベルがルビノの病気の治療法を一般に普及しようとな
ないのが気になって、この話を書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7717k/>

くじびき勇者さま 誰が愛の女神よ！？

2011年1月30日00時08分発行